

50年前のプロジェクトOU

“1968吹田キャンパス誕生”

2018年の幕開けです。

実は、2018年は吹田キャンパスへの移転後50年の記念の年です。吹田キャンパスへ初めて移転してきたのが、1968年4月の微生物病研究所とその附属病院で、同年10月に産業科学研究所、それ以降、工学部などが次々に移転し現在に至ります。

私たちが当たり前のように過ごしている吹田キャンパスは、50年以上前は竹や雑木が茂る今とは異なる風景がひろがっていました。豊中キャンパスの実に2倍の100万㎡を誇る巨大キャンパスの誕生には、当時の関係者の並々ならぬ努力と地域からの大きな応援がありました。

大阪大学五十年史等をもとに、吹田キャンパス誕生秘話を紐解きます。

移転後間もない吹田キャンパス（1970年）
出典：大阪大学絵はがき（第1集）

悲願の キャンパス統合へ

7代総長赤堀四郎の頃、本学施設の統合整備の必要性が一層高まり、1962（昭和37）年4月、長期計画委員会を発足させて、その問題の検討を積極的に推し進めることになった。

その頃、工学部は東野田地区と枚方地区にあったが、1957～1958年には産業界の高度成長によって理工系技術者の大量需要が起き、学科および講座が急速な膨張を遂げ、同時に、科学技術の急速な進展に伴って、工学部の研究・教育体制とその施設を抜本的に改善する必要が生じた。2地区に分かれている不便さに加えて、主となる東野田地区は狭小で環境条件が悪化しており、これらの地においての実現が困難と認められ、移転を検討しつつあった。一方中之島地区にあった微生物病研究所においては、敷地面積の狭いことに加えて、都市公害による研究障害を来し

つつあり、また跡地利用についても電電公社から話があったので移転を考慮していた。また、堺市浅香山にあった産業科学研究所も移転を考慮中であった。

候補地「吹田」へ 難航の予感

現在の吹田地区への移転が検討され始めたのは1962年の暮であった。本学が移転用地を探していると聞いた当時の吹田市長村田静夫は、吹田市を将来学園都市化したいとの念願を持ち、本学のために積極的に用地を世話すると確約したことに始まった。そこで、当時の工学部長岡田實は吹田市と交渉を開始し、将来の拡張をも考慮して165万㎡の面積の取得を希望し、暮も押し迫った12月28日に総長赤堀四郎、長期計画委員会委員長足立孝（工学部教授）などの関係者が、新しく開発されつつ

あった千里ニュータウンに隣接する候補地の現地調査をおこなった。

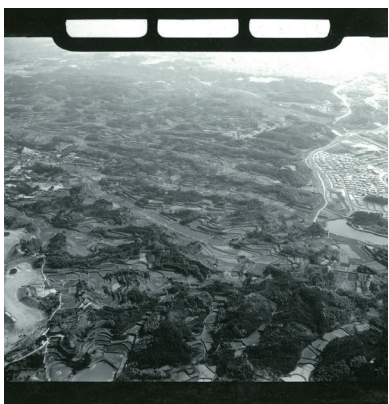
その頃の候補地周辺は竹やぶ、松、雑木の茂った丘陵地であったが、格好の地と判断した関係者は、その165万㎡の土地取得に全力をあげて取り組むことにし、全学の有志教授7人は連名で「全学集結の提唱」という趣意書を配布して吹田への全学統合移転を呼びかけた。そのメンバーは微生物病研究所教授藤野恒三郎、医学部教授小浜基次、工学部教授菅田栄治、同新津靖、同鷲尾健三、同菊川真、同伊藤富雄であった。この呼びかけに対して、その頃の候補地が交通不便の土地にあったこと、用地買収のための資金調達の困難さと買収工作のわずらわしさなどから、必ずしも学内全部局の賛成を得るまでには至らず、説得には時間を要するような雰囲気であった。



造成工事着工直後 微生物病研究所用地より工学部入口付近を望む（1966年）
出典：写真集 大阪大学の五十年



現在の千里門付近の様子（2018年）
撮影：企画部広報課



吹田用地を色々な角度から見た空中写真(1965年)
所蔵:企画部広報課

ムーブメントをおこし 逆風を越える

しかし、赤堀はじめ移転を希望する部局の関係者は、用地購入資金などの困難な局面を開拓するために大蔵省・文部省に出向いて理解を求めたり、本学後援会および吹田市の有力メンバーである朝日ビール社長山本為三郎に協力を依頼するなど、関係各方面に精力的に働きかけた。学内的にも1963年3月の部局長会議で、用地取得のための用地委員会が設置されるなど吹田移転に向けての態勢は固まっていた。

これに対し、政府も本学の統合移転計画に理解を示し始め、また吹田市長も本学の吹田市誘致を施政方針の一つとして打ち出すなど学内外に吹田移転の気運は高まっていた。このようにして1964年3月の長期計画委員会には吹田移転に関する第1次5ヵ年計画案が提出され、承認されて吹田移転の準備態勢ははばでき上った。1964年6月には吹田移転を評議会決定し、同7月には1965年度統合整備概算要求書が提出された。

問題は用地買収とそのための資金調達であったが、吹田市は用地買収のために大阪府知事の許可を得て財団法人吹田市開発協会を1964年3月に発足させた。また学内においても財政投融資による資金調達に見込みをつけるかわり、9月には大阪財界人11人からなる大阪大学移転統合期成会を結成して、政府関係筋に働きかけてもらうなど局面の開閉に全力をあげた。こうした努力の結果、吹田市開発協会

においては農林中央金庫から融資が受けられることになり、また財政投融資による国立学校特別会計の借入金によるものであるが、1964年12月には用地取得費20億円が概算要求として計上された。これは1965年度から国立学校特別会計が設定されて、学校予算のなかに財産処分収入や借入金をも加えることができるようになったためであり、本学の移転にとっては好都合であった。

さらなる困難を越えて

資金調達の方策が検討されている間に、阪急電鉄不動産部が取得予定地の一部を競合して買い始めるなど、買収工作は必ずしも順調ではなかった。この間、大学で検討した結果、当初に買収予定の165万㎡を100万㎡に縮小することにした。その一方で文部省は、大蔵省と打ち合わせて、1965年11月、本学の吹田移転に関して国立学校特別会計法施行令一部改正を議会に提出し、また12月には近畿圏整備法にもとづく本学の統合移転の閣議了解を取り付けるなど、本学の吹田移転を法的にもバックアップした。かくて、1967年から1972年までの間に、微生物病研究所、同附属病院、産業科学研究所、工学部、蛋白質研究所、学生寮の移転が確定し実施の段階に入った。

移転候補地のかなりの部分が私有地であるため買収が順調に進まず、また大学側の事情で用地を縮小したことなどがあって、吹田市提示の候補地も図4-6(A)の第1次案から(B)の第2次案へと変わり、また1970年に開催された

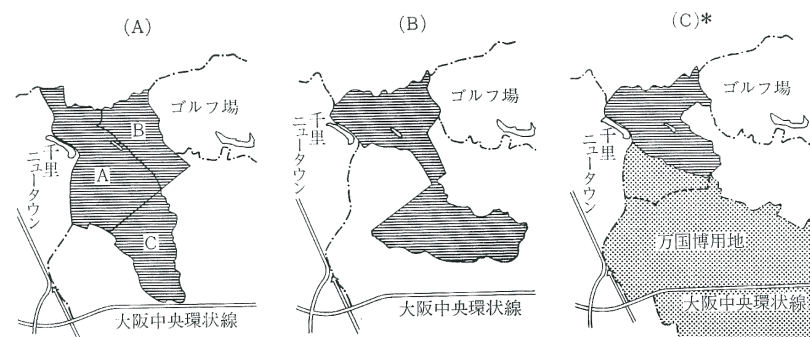


図 4-6 吹田地区候補地の変遷

日本万国博覧会の会場が千里丘陵に決定した1965年4月の時点では、本学用地として予定していたかなりの部分を大阪府に譲らざるを得なくなったので、(C)のような約66万㎡にほぼ落ちついた。それでもまだその中には未買収地が残り、さらにまた前記阪急電鉄不動産部所有の土地もあるなど、多くの問題をかかえていたが、1965年9月には吹田地区の輪郭がはっきりした。そこで、移転問題連絡会議(用地委員会の後身で、1964年11月に発足)で移転部局の調整をおこない、吹田全体計画第1次案を立案し、それが長期計画委員会、部局長連絡会議、評議会承認され、さらに原則が確立されて、具体的な計画作業がスタートした。計画の技術的部面については工学部の関連学科が総合して協力し、各種の難問を解決した。

吹田地区の幕開け

この第1次案においては、66万㎡の敷地の利用法および各部局別の敷地面積の割当基準などを定めた。敷地利用法においては、文部省の「国立文教整備方針」に準拠して検討され、建物敷地(本来の建物敷地、道路、緑地、広場、駐車場を含む)の50%を空地として残し、将来の増設などに備え、また全体敷地の約10%を厚生施設としての運動場用地として確保した。次いで、まず幹線道路を決め敷地の割当基準にしたがって部局の位置づけをおこなった(図4-7)。なお、この学舎の計画は次の点で独自性の高いものであった。(1)敷地の外周に沿った丘陵部と敷地中央の犬飼池周辺の丘陵部などの山林を地区共通の自然緑地として保存し、豊かなみどりの景観を確保したこと、(2)学舎と学外地域とを遮断する塀・柵・門の類は一切造らず、開放的な学舎としたこと、(3)工学部において歩車分離を徹底し学内の遊歩環境を作り出したこと、(4)同好会システムによる通勤バスを通して足の便を向上させたことなどである。

100万㎡の敷地を希望していた本学としては、万国博覧会終了後その跡地

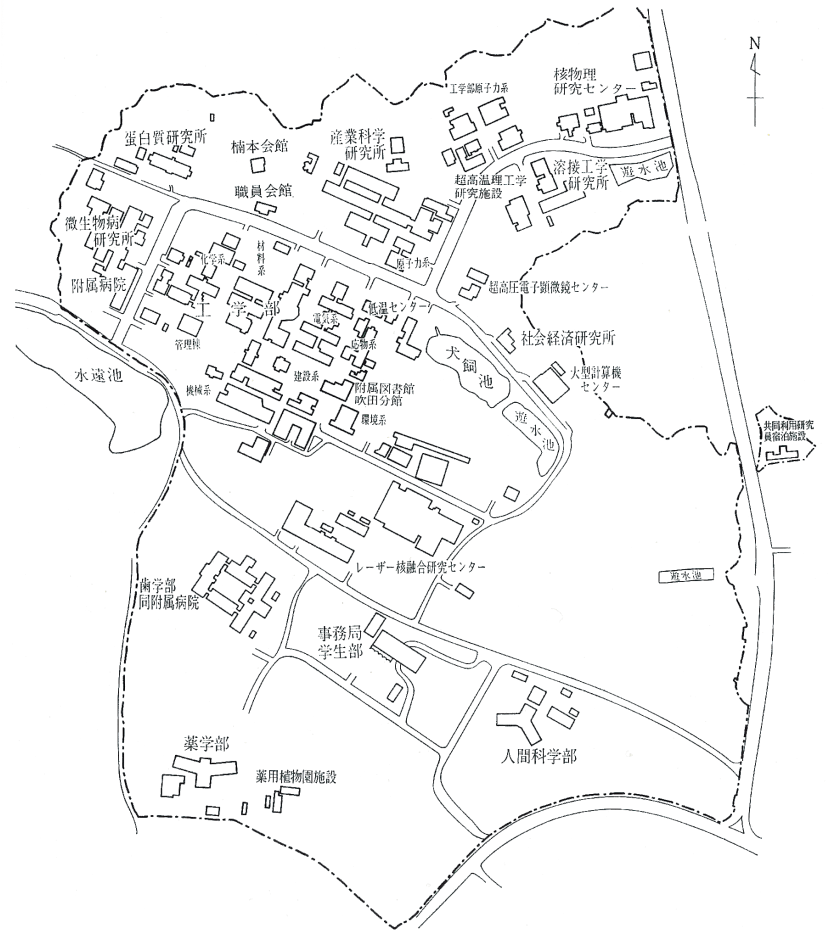


図 4-7 吹田地区配置図 1982年現在

から約33万㎡を入手する必要がある、その取得についても関係筋に積極的に働きかけた。その結果、1966年5月に大阪府が発表した万国博覧会跡地利用計画第2次案のなかには本学を含む学園地区として71万㎡が計上された。このように跡地取得に関して希望の持てる状態で、1966年5月14日、総長赤堀、吹田市長村田、文部省管理局長天城勲、関経連会長阿部孝次郎および移転部局関係者が出席して本学吹田

地区起工式が挙行された。そのあとブルドーザーで整地され始めたが、千里丘陵に響きわたったその音は吹田地区の幕あけを告げるものだった。

大阪大学五十年史 第4編大阪大学の発展
第4節 吹田地区から抜粋(一部を修正しています)



吹田キャンパス空中写真(1978年)
出典:大阪大学経はがき(第4集)

吹田への移転

8代岡田實総長による随想

私が一番考えたのは、枚方が非常に便利悪いんです。だから、工学部は何とか集まる必要があると思いました。当時お城の下と枚方と東野田と三つに分かれていたのです。少なくとも工学部を一カ所にするぐらいのことを考えなければいけないし、またそれよりも大阪大学そのものが、石橋にあり中之島にあり、それから工学部は分かれているでしょう。産研は産研で堺にある。そんなふうでタコ足大学の代表みたいな状態だったわけですよ。工学部が率先してでも、みんなで集結するようにリーダーシップをとるといいます。

まず大阪大学だから、大阪府下で適当なところを選ぼうというので、バスを雇って随分方々を探したんです。南進もありました。長野の辺まで行ったんですよ。河内長野の辺まで行きましたね。それでみたけれども南の方は便利が悪いので、できれば北の方がいいと考えました。



完成後間もない大阪大学本庁舎(1980年)
出典:大阪大学本庁舎竣工記念 冊子



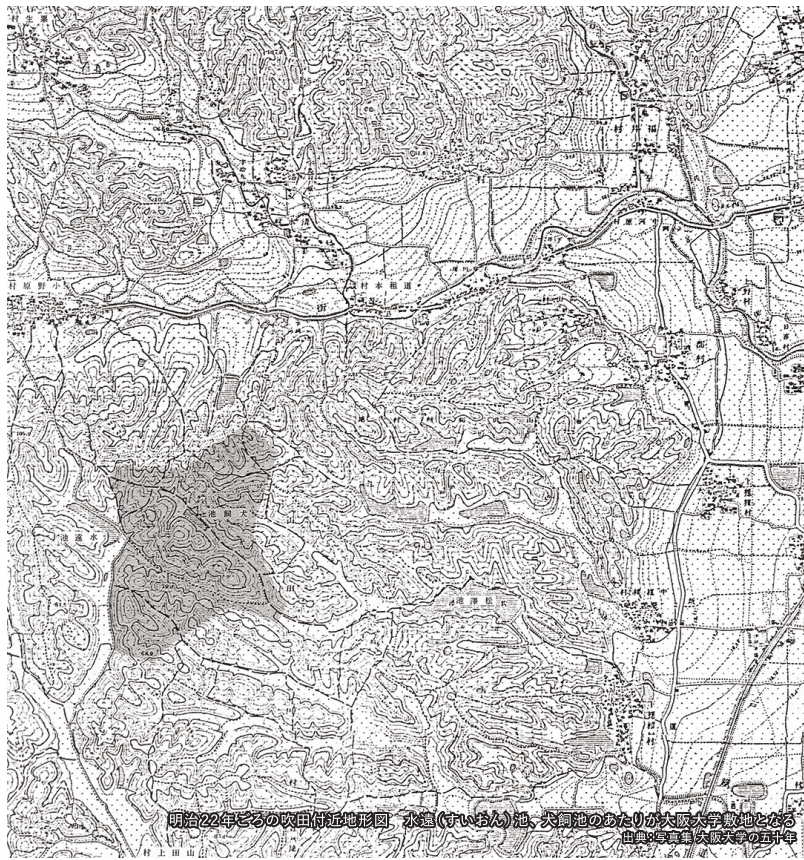
現在の本部署機構棟(2018年)
撮影:企画部広報課

その前に田中清先生(土木工学科)が阪大の将来計画の委員長をやっておりましたとき、田中先生は、今の石橋は将来交通の要衝になって非常に殺到するところだから、あそこはいけないといっていました。しかし、あそこを拡張するという案があったんです。南の方は田中先生の意見でも、あまり歓迎されなかったんです。どうしても北部の方へと先生はっていました。

私がずっと欧州、アメリカを回ってきて、大体一つの総合大学のキャンパスの単位は50万坪ぐらいが必要だと思いました。それで統合集結できたら、大阪大学も立派になるだろうと、50万坪ぐらいを標榜していろいろ探しておったときに、吹田の市長が、吹田市は本当に文化的にいいところがないと言うんですよ。それで文化的な街にしたいので、阪大が吹田に来るなら、応援をするという話を多賀谷(正義・工学部教授)先生が持ってきてくれたんです。多賀谷先生は吹田市の水道部の顧問をしておられたのです。そこで私はすぐ吹田市へ行きました。そして今あるこの辺を、

関西原子炉の時も調べてあったんで、広さも十分あるということでした。ただ水がないのですね。水がないので原子炉は熊取へ行ってしまったのです。ほかから水を引いてくれば十分使えるし、吹田の水道部も、多賀谷さんも、何とかするというわけです。それでここを開発するべく、吹田市と連絡をずつとつておったのです。

8代総長 岡田 実(当時工学部長)
座談会:大阪大学工学部の戦後史
(『大阪大学史紀要 第1号』1981年)より



明治22年ごろの吹田附近地形図。水通(いづみ)池、大飼池のあたりが大阪大学敷地となる。旧奥多摩谷分校の跡地。

移転前夜

大阪大学 名誉教授 脇田 修

この(吹田キャンパスへの移転)以前の状況については、千里丘陵のなかで竹林と松と雑木山が続き、溜め池と田畑があって、そのなかを吹田から北へ向かう道が通っていた。それは今も部分的に残っている風景から想像してもらうしかないが、その変貌はいちじるしい。

千里ニュー・タウンができ、万博がおこなわれ、その跡地に万博公園ができたが、なによりも国立民族学博物館ができ、中之島などにあった大阪大学の本部事務局や学部・研究所・センターまた病院が移転してきて、ここは新たな文教地区になった。

吹田の町は、神崎川に沿った交通の要衝であり、また風光明媚なところから平安貴族の別荘がおかれるような土地であった。しかしその北の千里丘陵は、先に記したよりも原野的な状況であったろうから、平安時代には摂関家

領垂水東牧が置かれていた。牧というのは、牛馬などの飼育・放牧をおこなうところである。

それでも中世以降には開発が進み、近世初期には山田郷五か村とされる上・中・下・小川・別所の各村が成立している。そして大阪大学の敷地は、山田村のなかで、もともと北部にある上村の土地ではなかったかと考えている。これらの村々は、幕府直轄領から、譜代大名の領地となり、中期以降は淀藩・稲葉家の支配が多かった。上村でいうと幕府直轄領・京都所司代板倉重宗・淀城主石川・松平・稲葉諸家の所領となっていた。

さて時代によって異なるが、上村の高は1千石を越え、1,512石余を記録したこともある大村であるが、その40パーセント余が、近世前期に板倉が新田分と認めたものであったから、この開発の盛んなことを知りうる。またこの地域は木綿・蔬菜などの作付けが多かったが、上村は稲作が主で、本田分で80パーセント余、新田分でも55パーセントとなっていた。このため多くの

溜め池をつくって、灌漑用水を確保したのである。したがって池水の管理はきびしかった。キャンパス内の大飼池などについての事情はわからないが、元禄6年(1693年)山田五か村が結んだ新池に関する取決めは、取水の順や違反のさいの罰金など詳細を極めている。

吹田キャンパスは千里丘陵内にあったため、他の地区のような華やかな歴史はないが、ここでも先人が生活向上のために、新田開発に務め、大きな努力を払ったことがわかる。ここではそれを少し追ってみた。

● 脇田 修(わきた おさむ) プロフィール

1931年大阪市生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得。京都大学文学博士。大阪大学文学部教授、文学部長、評議員などを務める。94年大阪大学名誉教授。大阪大学出版会会長、大阪歴史博物館館長などを歴任。

学報 第530号・大阪大学夜話第九話
『吹田キャンパス』より抜粋(一部を修正しています)